



進行役 鵜飼教授

お話を聞いて・・・

コレクティブインパクトについて

今お話に出た「コレクティブ・インパクト」ですが、これは社会課題の解決に向けて、個別の団体がバラバラに取り組むのではなく、連携して取り組んでいくアプローチです。

私自信多賀町で空き家活用に向けた試験的な取り組みを進めています。空き家バンクを扱う業者や関係団体は複数ありますが、情報が錯綜し、地域が求める定住者がなかなか来ないという課題がありました。そこで協議会を立ち上げ、町も巻き込みながら情報を共有し、連携して空き家を活用する動きを始めています。

もう一例は、気仙沼でずっと活動している田中 惇敏(たなか あつとし)さんが立ち上げた「クラウドジャパン」。子育て支援団体が毎年補助金を競い合う現状を見直し、ネットワークで協議しながら必要な支援を届ける仕組みづくりに取り組んでいます。こうした動きを滋賀県全体にも広げられたらと考えています。たとえば、「健康しが」をテーマに、県全体でファンドを立ち上げ、企業と連携して資金を循環させる。仮に50億円規模のファンドができれば、その運用益だけで多くの現場を支えることができます。特にマンツーマンの支援が多い現場では人件費が大きな負担になるため、こうした持続可能な仕組みが必要です。

大阪マラソンのように、参加費＋スポンサーからの寄付を組み合わせることでファンド化する仕組みが実際にあるため、びわ湖マラソンでも同様の取り組みができないかとお話させていただいたことがあります。

多様な“健康”活動を応援する仕組みがつくれるのではないかと感じています。「健康しが」という枠組みを活かせば、運動に限らず様々な健康を高めるために、“健康しが”の活動を応援する仕組みがつくれるのではないかと感じています。また、余談ですが**企業との連携による「リユース寄付」**という取り組みをしています。BOOK OFFと連携し、寄付された本などを会社が買い取り、その代金がNPOの活動資金になるというものです。最近では、滋賀県のある大学の先生方が福祉学科開設にあたって本を集めてくれ、20箱で約8万円の寄付につながりました。チラシ配布などでは難しい寄付も、こうした仕組みづくりによって、自然にお金が出る流れが生まれることが実感しました。



特定非営利活動法人
こどもソーシャルワークセンター
幸重さま

現場に入りたい気持ちはあるのですが、実際はお金や経営のことばかり考えざるを得ないのが現状です。幸重さんのように、寄付・助成金・スポンサー連携など多方面から資金を確保している事例を見ると、やはり総合的な動きの大切さを実感します。私たちはNPOを立ち上げてまだ1年ほどで申請中です。調べてもどの助成制度が自分たちに合っているのかも分からず、手探り状態です。「企業が出資しやすいポイント」や「協力を得やすい伝え方」など、アドバイスをくれる存在がいたら助かるとすごく思っています。最近出会った、中高生のユースセンターを運営している方は、中高生に企業体験やインターンなどを提供して資金を得ていると聞きました。ただ、私たちの対象は主に小学生で、そういったモデルがそのまま適用しにくく、そこでまた壁にぶつかっています。だからこそ、壁打ち相手や伴走してくれるアドバイザーの存在が必要だと強く感じています。



ぼくらのアカデミー
綿谷さま

資金調達、今いちばん頭を悩ませている課題です。私自身も本業を持ちながら活動しているので、莫大な金額が必要というわけではないのですが、実際には私たちスタッフは全くの無報酬で活動している状態です。さらに、休みの日には会計ソフトにとらめっこしたり、助成金を探したりと、そういった作業に多くの時間を費やしています。けれども、そうした時間が取れなければ「居場所」を続けていくことも難しくなるという、何とも言えないジレンマを常に抱えています。



一般社団法人蜜柑の木
永峰さま

そうですね。

私が活動している多賀町大滝では、新しい取り組みとして「お酒づくり」に挑戦しています。古い酒蔵が残っているのですが、日本酒の免許は新たに下りないため、リキュールを作ることにしました。

酒粕をアップサイクルして原料に使い、地域の野菜やハーブ、さらには地元のお母さんたちが育ててくれたハーブを買い取って漬け込み、薬草酒をつくるというプロジェクトです。年商20億円を目指すと宣言して取り組んでいます。

なぜ20億円かという、私の根本にある思いは、「子育てに負担のない地域をつくりたい」ということです。大滝地域でも小学生の数がどんどん減っていて、この流れをどうにか食い止めたい。そのためには、子育てがしやすい環境を整えることが最も大切だと感じたんです。だからこそ、会社を立ち上げてお酒の事業を起点にし、その利益を地域の子育て支援に還元していく。そんな循環をつくりたいと考えています。

まだまだ長い道のりですが、時間をかけて実現していきたいと思っています。



進行役 鵜飼教授
よりコメント